
ドラゴン・ファイト

肩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドラゴン・ファイト

【Zコード】

Z5491T

【作者名】

屑

【あらすじ】

友達の一言から始まつた、某友人が主人公の中二病小説！
本人たちには黙つて連載中！！

正直ばれる気がしない！！

人類は未だかつてない最大の危機に陥っていた。それは、ドラゴンからの侵略。人類はドラゴンに対抗するため戦闘技術を身に付け、文化を発展させた。その結果、人類はより強大な敵に立ち向かうため、少年少女を戦闘に加えることを決め、そのための学校を造った。

ドラゴンを恨み、絶滅させることを信念とした少年。
歯に衣を着せない超毒舌の少女。

おちやらけボケ担当の少年。

正体不明の生物の研究生。

やる気のない先生。

ドラゴンをこよなく愛する特待生。

その他諸々。

そんな彼らが織りなす楽しく悲しい物語。少年は果たして信念を
突き通すことができるのか?

「意見」「感想をお待ちしております。

プロローグ

暗闇の中、子供の頃の俺の前を両親が歩いている。俺は一人の間に入ろうとするがどれだけ頑張つても追いつかない。それどころか、二人との距離が徐々に離されていく。子供の頃の俺は泣きべそを搔きながら必死に走る。しかし、健闘むなしく一人は暗闇の中に消えていく。そして突然周りが業火に包まれ、二人の悲鳴が聞こえる。声すら出ない子供の頃の俺が最後に見たのは、業火の陰から覗く黄金色に輝く大きな瞳。目を覚ますのはいつもそこだった。あの黄金色の瞳、今でも忘れない忌々しい瞳。それと目を合わせた瞬間に夢から醒める。あの後どうなったか、覚えていない。

俺はベットから出て一階に降りる。一階には誰にもいない。一人には少々広すぎる台所でトーストを焼き始める。きれいに整頓された家で食事をするのも今日が最後だ。今日、俺はこの家を出していく。恐らくこの家に、この村に、もう帰つてくることはないだろう。焼きあがつたトーストにバターを塗る。これからは通う学校の寮に住むことになる。不安はない。あの目的を果たすまで、俺は死がない。トーストを食べ終えて二階に戻る。部屋で真新しい服に袖を通す。あの学園は俺にとってうつてつけだった。あの目的のためなら、どんなものでも利用してやる。

着替えを終えた俺は荷物を担ぎ、ベルトに鞘を取り付けて家を出る。そして家の横にある墓地に立ち寄つた。二つの寄り添うように佇む形だけの墓石。名前は彫られていない。俺は静かに合唱して、故郷を後にした。そして村に住む者は誰一人いなくなつた。

「ありがとうございました……」

二頭立ての馬車の運転手に運賃を払い降りると、その莊厳な建物は眼前にそびえ立っていた。王立フランニア軍事学園。終りの見えない塀からの入り口に建物の名前の刻まれた縦看板が取り付けられている。城下町から少し離れた山間の村の横に切り開いて作った名前からもわかるようにこの学園は軍人を育成するための学園だ。しかし、対人戦になることは殆どない。お互い相手している暇がないのだ。人間は今、最大の危機を迎えているのだから。

校門を通り、同じ制服を着た同じ年代の人たちがちらほらいる。皆不安と期待の入り混じった表情をしているのが見て取れた。自分のああいう表情をしているのかと、ふと思った。俺は浮かんできた考えを鼻で笑つて飛ばした。俺にはそんな気持ちになるはずがないのだ。路傍の石になるために俺はここに来たのだ。俺は人ごみに従い、中央の建物から少し右に離れた講堂に向かう。

講堂の中は整然とした空氣に包まれていた。教会に似た造りで、左右の長椅子に挟まれたレッドカーペットは一直線に聖壇にのびている。入り口の反対側に面する壁の半分を使つた巨大なステンドグラスは背後から日差しを浴び、神々しく感じられた。それは色彩だけでなくステンドグラスで描かれた講堂にはまばらだが生徒が着席している。席の後ろには受験の時と同じ番号の紙が貼られている。俺はポケットから受験票を取り出して、番号を確認する。後ろから五番目の真ん中辺りの席。周りに生徒はまだいなかつた。俺は長椅子の後ろを迂回して着席する。

朝一番の馬車に乗ってきたので眠気が襲つてくる。仮眠ぐらいならと思い、ベルトから得物を外して、それを抱いて目を瞑る。しかし、俺の仮眠は突然の怒声に妨げられた。すっかり覚醒してしまつた俺の意識は講堂の外に集中される。はつきりと何を言つてゐるの

かは分からぬが、結構な大声だ。

講堂の生徒たちは止まない怒声を不審に思ったのか、野次馬魂をくすぐられたのか、一人、また一人と講堂の入り口に向かう。どうせ素行の悪い生徒が先生に怒られているのだろう。と勝手な推測。気になりはしないが少々怒声は鬱陶しい。俺は得物を持って席を立つ。ドアの近くで様子見をしている生徒たちを横目に講堂を出て、怒声の聞こえる方を見る。俺の推測は全くもっての大外れ。怒声を浴びせているのは、俺と同じ制服を着た同級生だった。その生徒は何故か黒スーツの大男二人に挟まれている。そして怒声もとい罵声を浴びせられているのは同級生、しかも女子だった。

背中の中ほどまで伸びた直毛の黒髪。それら全体を後ろで一本に縛った髪型で小さな額が磨かれたように汚れ一つない。目は少し細く、相手を睨んでいる印象を受ける。小さな鼻と顔立ち。真一文字に結んだ血色のいい唇は白人の彼女の中でひときわ際立っている。いわゆるクールビューティというやつだ。彼女は腰に手を当てて、罵声をずっと浴びている。

止めようとする者は誰もいない。半径十メートルには入らず、隣にしか聞こえない声で何か話している。周りを見渡している途中で二人の教師が騒ぎを観察しているのを見つけた。片方はファイルを確認しながら、もう一人の教師と何やら言葉を交わしている。気づけば、一人の教師に目を奪われている間に状況は進展していた。

「同じことしか言えないんですか？ 馬鹿の一つ覚えみたいに。まあ馬鹿だから仕方ありませんか」

彼女は小さな溜息をつくように、だが周りの野次馬にも聞こえる声量で言った。途端、相手の顔が湯気が出そうなぐらい赤く染まり、黒スーツの一人を叩く。黒スーツの一人はベルトに付けていた警棒を取り出し、彼女に構える。彼女はその状況になつても行動を起こさない。それは教師たちも同じ。彼らは小言を言いながら、騒ぎを收拾しようとしている。

「やれーー！」

相手の叫ぶような合図に黒スーツたちが警棒を振り下ろす。彼女を中心とした左右からの襲撃に彼女は一步下がって応対する。黒スーツたちは地面に叩きつけた警棒を斜めに振り上げる。腹部を狙う一対の警棒を彼女は両の手で掴んだ。

「こんなものですか、期待外れですね」

彼女はまた溜息をつく。黒スーツたちが押そうが引こうが警棒を取り返すことができない。彼女は警棒を放るように捨て、黒スーツたちとの間合いを造る。三度向かって来ようとする黒スーツたちの足元に何かが飛来し、行動を停止させる。気づけば彼女はどこからともなく自身の身の丈以上に大きい、一メートルはある如意棒のような棒を取り出している。右足を前に腰を落とした姿勢になつている。黒スーツたちの足元に放たれたそれは俺が見たことのない小道具だつた。菱形の先端に指が一本入るぐらいの輪を付けた鉄製の投擲武器。武器の観察に集中していると、唐突に背後から何かが圧し掛かってきた。

「知ってるか、あれは苦無って言うんだぜ」

俺は耳元で喋った声の主の方に顔を向けた。長身でメガネを掛けたもさい感じの男だ。しかも馴れ馴れしくて鬱陶しい。だがいきなり突き放すのも感じが悪く思われてしまう。ここはそつなく離れるのが得策だろう。

「すみません、重

「分かるか？ 苦しみが無いって書いて苦無。確か極東の島国が発祥って聞いたな。それに性格のキツイことこの上ないな。顔はまあまあのに性格があれじや誰も寄りつかないよなー。あ、俺、カルロス・大田・ロベルト・シウバ・一樹つていう日系ブラジル人なんだ。よろしくな！」

カルロス・大田何とかとかいう男はどうやら馴れ馴れしくて鬱陶しいだけでなく、人の話も聞かない奴のようだ。カルロス・大田何とかは満面の笑みで手を差し出して來た。

俺は仕方なくその手を握り返す。『じつじつした手を握ると少し汗ばんでいる。顔には出さないが顔といい、手といい気持ち悪い。これからもこんな奴と関わらなければならぬになると、気が滅入る。人間関係に悩まされそうだ。

気持ち良いくらいに響いた金属音に、ハとなつて前に視線を戻す。太田などそっちのけだ。

警棒が空を切る。黒スーツたちはまだ彼女をどちらかでいられない。彼女は必至な彼らを嘲笑うかのように。いや、明らかに嘲笑つている。口角を吊り上げて、蔑んだ目を黒スーツたちと、一人の主人に向かられていた。二人の主人は倒すどころか、一撃すら与えられないことに、見るからに苛立つている。

それにしても、彼女の棒術は目を瞠るものがある。大の男二人をいなし、絶対間合いを取らせない。彼女は攻撃できそうな時でも攻撃しようとせず、相手との格差を見せつける。

「それにしてあれ、いつ終わるんだろうなあ？ 入学式まで後十分しかないぜ」

太田の声が聞こえたのか、彼女の動きが変わった。彼女は今までいなし続けていた黒スーツたちを攻撃の態勢に入る。黒スーツたちもその変化に気付いたのか、一旦間合いから離れる。正しい判断だ。と思った瞬間、彼女はその考えを覆した。

彼女は自ら左の黒スーツとの距離を跳んで詰め、頭から棒を振り下ろす。面食らつた黒スーツは慌てて警棒を頭に構える。彼女は振り切る前に棒を手元に戻す。

地面にしゃがむように着地した彼女は、警棒が来る前に足払いでの黒スーツを転ばせる。太田は後ろで、なんだよスペツツ穿いてんのかよ、と一人愚痴っている。立ち上がりうとする彼女の背後にもう一人の黒スーツが迫る。彼女は振り返ることなく、棒を背後に刺すよ

うに下げる。それは黒スーツの腹を的確に捉えた。黒スーツは警棒を持つていらない手で腹を押さえ、それでもなお彼女に警棒を振り下ろそうとする。転ばされた黒スーツも体勢をしかし、背後の黒スーツの一動作は遅れることにより、勝敗は決する。

気付けば、二人の黒スーツは地面に倒れていた。意識はない。横顔に迫る棒に気付かず、正面に食らった黒スーツたちは地面を転がり、負けた。

「おいおい、いくらなんだって大の男一人をああも吹っ飛ばせる力つて……」

太田が驚きの声を呟く。だが、俺たちにはもっと力が必要だ。それ以上の相手と俺たちは今後戦うことになるのだから。

彼女は棒をいくつにも折り畳み、背中から制服の中に入れられた。恐らく背中に収納器具をつけているのだろう。彼女は髪を振り、手櫛で乱れを直す。彼女は周囲の視線を一身に集めながら、歩き出す。その先是講堂。俺も戻ろう。俺は太田を連れて講堂に戻る。

講堂にぞろぞろと生徒たちが戻っていく。俺はその中からあの教師たちを見つけ出した。彼女が戦っていた時に見つめていた二人の教師だ。一人も何事もなかつたかのように講堂に足を向けている。結局、あの二人は一体何がしたかったのだろうか。止めるわけでもなく、注意するわけでもない。

「おい、なにやつてるんだよ？ 置いてくぞ」

太田に肩を叩かれ、自分の足が止まっていたことに気付く。俺は一言謝つてから何事もなかつたように歩き出す。聞ける機会があれば聞けばいい。講堂には最初よりも多くの生徒が席についていた。開会式まで後五分。外から戻ってきている生徒も合わされば大体の生徒が揃うだろう。

俺は太田と別れ、自分の席に戻る。俺の右側の席には男子生徒。左には……。

「私の顔をそんなに見つめて気持ち悪いんでやめいただけますか？」

俺の左に座った ついさっきまで黒スーツの一人と争っていた彼女は、横目で睨むように見つめてきながら言つてくる。

初対面の相手にでもこうなのか。一体どういう育て方をしたらこんな性格になるのだ。内心、親の顔を見てみたいと思いながら、前に向き直る。話し掛けて、わざわざ嫌な思いをしなくてもいいだろう。

学園のチャイムが鳴り、講堂のドアが閉められる。そして、全体的に太い男性が聖檀の前に立つた。詰襟の礼服がパンパンになつている。礼服のサイズが小さいわけではないようだ。

袖の先から出ている角張った拳からして、体つきは筋肉隆々で服の上からでもそれがわかる。服がそれに沿つて筋肉に張り付いている。

丸太のような太さをした腕や足。強もての顔には、火傷や引搔き傷が色濃く残っている。幾多の戦場を切り抜けてきたような顔だ。聖檀に立つた男性はマイクを手に取つた。そして大きく息を吸う。

「新入生全員、起立！！」

講堂を揺るがすほどの声に、本能的にかその場の新入生が一斉に立ち上がる。その顔は一部を除いて一様にキヨトンと、何が起こったかわかつていらない顔をしている。男性は周りを見回してから、マイクに言葉を紡ぎ始める。

「新入生の諸君、まずは入学おめでとう。これから日々精進し、国に貢献できる人間になつてほしい。と、形式めいた話はここまでだ。ここからは戦闘教員としての言葉だ。戦闘学部の新入生たちよ。死なない覚悟はあるか！？　いいか、決して死ぬな！！　死ぬときは一体でも多くの敵を殲滅しろ。どうしても勝てない時は道連れになつてでも殺せ！！　無駄死にはするな！！　自分が役に立たないと分かつたやつは即刻ここから出て行け！　こちらが役に立たないと感じた奴も否応なしに追い出す！　足でまといはいられない！！　やる気のない奴は今からここを去れ！！　これで挨拶を終える。新入生、着席！！」

そして、新入生が統率のとれた動きで着席する。怒声のような声を張り上げた野太い声の迫力に肌がピリピリする。周りが生徒たちの声にざわつき始め、お互いの顔を見合わせる。

予想外の挨拶である。まさか、入学式にこんなことを言われるとは。

だが、それだけの覚悟が必要ということなのだ。生半可な覚悟ではすぐに死んでしまう、つまり犬死だ。足でまといは死ぬどころか仲間すら道連れにする可能性がある。仲間とは言つてはみたが、それはおかしいかもしない。危機を感じれば簡単に見捨てる出來る相手を仲間と呼ぶべきなのか。俺にとって、それは利用すべき道具でしかないのだから。

それからは、どことも変わらない伝統的で退屈な進行でクラスご

とに退席し、指定された教室に移動する。

俺が教室に入ったとき、生徒は俺を除いて六人いた。その中には、あの毒舌の彼女と太田の姿も見られた。あの一人と同じクラスなのか。それだけで少し、いやかなり気が滅入る。窓際の席の彼女はこちらを一瞥した後、溜息を吐いて外に目を向けた。廊下側で先頭の席を陣取つた太田は、嬉しそうにこちらに手を振つている。ほかの生徒は見た目は至つて普通だが、中身は分からぬのが不安である。今後の友好関係に支障が出ないことをただただ望むばかりだ。毒舌二人を相手にするのは流石にキツい。

俺は等間隔で二列に並んだ廊下側の一一番後ろの席を取る。周りを見渡せて、動きが観察できる。人間觀察には最適の場所だろう。男子五人、女子一人の計七人が最後の一人を待つていた。壁に掛かつた時計の秒針が刻む音が聞こえる。

それにしても……遅い。遅すぎる。俺が来てから既に十五分は経っている。入学式が終わつてから一十分。どう考へても講堂からは出でているだろう。講堂からここ 校舎の一一番端の教室 の道も一直線なので迷いようがない。もしかして入学式に出ていなかつたのか、それともあの一喝が原因か。あれで去るもののがいるとは正直思えない。今の現状を考えればこの学園に入学することが分からぬいほど子供ではないだろう。となれば、とてつもない方向音痴か、今朝の様なことがまた起こつているのか。

そんな矢先、教室のドアが開いた。

入ってきたのは、最後の生徒のはずである。確信が持てないのは、その生徒の身なりが原因だ。

全身に飛び散つた赤い血が真新しい制服を染め上げ、顔にも血が付いてる。制服は破れていたり目立つた外傷がないので返り血だと分かるが、これは流石に引く。窓際の彼女以外の生徒が注目し、唖然。最後の生徒は、両手に一本ずつ剣を持ったまま赤く染まつた顔を笑顔にしながら席に着いた。

誰も何も言えない。というよりも何をいえばいいかわからないのだろう。それが普通の反応である。だが、彼女は違った。窓際の彼女はすっと立ち上がり、眉間にしわを寄せた顔で血塗れの生徒の前に立つた。

「あなた、血なまぐさいん出でていってもられませんか？」

あまりにも直球な一言が血だらけの少年に飛ぶ。

クラスの雰囲気は憤怒と困惑に包まれていた。血まみれの少年も反応に困つてるようで、何も言えずにしてる。

彼女は鼻を押さえ、臭いと手を横に振つていて。血なまぐせの嘘ではないが、そんなこと、初対面の相手に面と向かつて訴つことじゃないし、あんな格好で現れた人に、出て行けなどと言える精神を持ち合わせている人間はそうそういない。

血だらけの少年は戸惑いながら口を開いた。

「けど、授業も始まりますし」

「あなたのその臭いで、クラスが授業に集中できません。世の中は少数より多数が優先されることを学ぶいい機会です。教室から出ていってください。むしろ、今すぐ出て行け。帰つてくんな」

彼女の怒涛の口撃に、少年は返す言葉が見つからなかつた。少年も何かを言い返そうとしているが、金魚のように口をぱくぱくさせることしかできない。

「なんですか、口をぱくぱくさせて気持ち悪い。言いたいこともいなぃんですか」

彼女の表情がますます険しくなる。動かない少年に苛立ちを感じてる。彼女は苛々した顔を解き、呆れたようにため息を吐く。

「自分で行動ができない、自分の意見も言えない。仲間を頼つて、いかにも作戦で足を引っ張る役立たず。あなたみたいな人がいると、邪魔なんです。私たちは一匹でも多くドラゴンを狩らなくてはいけないんです。そのためには足でまといはいません」

その言葉に少年が反応する。役立たず。邪魔。足でまとい。どの言葉が、間にさわったのかはわからない。もしかしたら全部かもしれない。が、少年は笑顔で包む空気を変えたのを感じ取ったのは確かだ。その変化を感じ取ったのはクラスメイトも気づいている

はずだ。関わるべきではない、全員がそう感じている。それでも飛び込む者が一人。

「笑つていないで早く出でていってください」

彼女は机を叩いて、ドアを指差す。睨みつける視線と無言の威圧。だが、少年は笑顔のまま彼女の腕をつかんだ。

「駄目だよ、人から好きなものを取っちゃいけないって習わなかつたのかな？」

少年は彼女の腕をつかんだまま、立ち上がる。少年の好きなもの。今の会話の中に、そんなものが含まれていたとは到底思えない。少年は笑顔を絶やさないまま、彼女の目を見つめ返している。

なんだが、一触即発起きそうな気がする。だが、いい意味でそんな空気をぶち壊すように教室のドアが開いた。

入ってきたのは、講堂での挨拶をしたガタイのいい大男。講堂の時は礼服をまとっていたが、訓練用の迷彩色のつなぎを着込んでいる。

「お前たち、何を騒いでいるんだ。早く席に着け」

教室に入ってきた大男の登場に、少年は彼女の手を離し、彼女は少年を睨みつけて、「授業が終われば校舎裏に来てください」と果し状を告げてから席に戻つていった。

俺達の担任は怪訝そうに一人を見比べてから、教壇に立つた。

「今日からお前らの担任になることになった、オーグ・ガダンだ。お前たちにクラスの編成について説明しておく」

黒板に三角形が書かれ、横に三本の線が加えられていく。一番上が特別特待生、その下に特待生、一番下が一般学生。

「この学校は完全成績主義だ。お前たちには座学は基本的にほとんどやらせない。クラス編成も体力や技術の向上をメインに授業。そして、強ければ強いほど学校の待遇も良くなつてい

る。まず、お前らの中で最も強いものが特別特待生。これは一人だけしかなれない。勿論、学校の待遇も違つてくる」

具体的には、学費の全額免除や生活費の支給。どちらも、一学生には手に余る相当な額らしい。寮室はホテルのスイートルームのような部屋が用意されているそうだ。特別特待生となれば、それだけ、学校としても国としても手放したくない存在なのだ。

お前たちにはこれになれるよう勵め。そのためには強くなるのもひとつ手だ」とガダン先生が告げる。

「次に特待生。これは三人だ。こいつらには学費免除、特別特待生とまではいかないが生活費も支給される。寮の部屋も一人部屋だ。それ以外は一般学生。学費も払つてもらつし、生活費も支給されない。部屋は一人部屋だが、特別特待生や特待生より小さい。まずは、特別特待生とは言わずとも特待生を目指すのが妥当だろう。そして、クラス分けは上から順に決まっていく。ここは一番上のクラス。つまり、目標がとても明確で分かりやすいクラス、というわけだ」

特別特待生と特待生。その言葉を聞いた何人かの視線が動いた。探るような目が教室を駆け巡る。一般生が自分たちの目標、あるいは標的を探しているのだろう。

「キヨロキヨロするな！」

ダガンの声に、浮いていた視線が止まる。全員が前を向き、ガダンの方を向く。

「心配しなくとも、今から名前を読み上げる。その順番が順位だ。名前を呼ばれた者は寮の鍵を渡す。まず、序列一位、セール・ハルト」

名前を呼ばれた生徒が席を立つ。立つたのは、一番最後に入ってきたあの生徒　血まみれの生徒である。彼が特別特待生。つまり、この学校の一年の中で最強だということだ。人は見た目で判断できないとはよく聞くが、あの異常性はどう判断すべきかわからない。

ガダンはセールの服を見ても何も言わなかつた。まるでそれが何もおかしなことろがないように、当たり前のようすに平然としている。セールは持つていた剣を腰から下げた左右の林檎色の鞘に仕舞い、深紅の手で鍵を受け取つた。

全てを赤く染めた彼が一位。俺もいづれあのように全てを紅く染まる時があるのだろうか。あるとすれば、それは遠くない時だろう。

「次、序列一位。スタン・R・サケイ」

立つたのは、前の席の生徒だつた。胸の辺りまである薔薇色の髪がさらりと揺れる。後ろ姿だけなら女性にも男性にも見えるが、微かに見えたその横顔は少なくとも肌色をしていなかつた。黒というか焦げ茶色に見えたが、長い髪が影になつたせいだろうか。まあ、制服がズボンだから男に間違ひはないのだが。身長は百六十五ぐらいで少し小さめだ。両手に皮の手袋を嵌めて、右肩から提げた細長い赤褐色のカバーは彼の得物が入つてゐるに違ひない。恐らく中距離型の間合いの広い武器、槍や彼女と同じ棍棒だ。ならあの手袋は滑り止めか。自分の短い間合いをカバーするためか。

スタンは鍵を受け取ると、自分の席に戻るためにこちらに向き直つた。その顔を見た数人が息をのんだ。俺もその例外ではない。

顔の三分の一が……ない。顔の中心から左の鼻筋を横切つて、そのまま直線的に伸びている境目。三分の一が黒く黒く、変色している。爛れていくわけではない。なのに、眉毛が、目が、まつ毛が、瞼が、ないのだ。

火傷？　だが、あんな綺麗に境界が出来るはずがない。もしかし

たら生まれつきか？ 気になるが、波風の立たない生活のためだ。
聞かない方がいいだろう。

「次、序列三位、六戸芽室」

鍵を取りに行つたのは例の彼女だった。三位という順位に不満があるのか、ハツ当たりに鍵を引っ手繩る。それをガダンはセールとスタンを誰にでもわかるように睨んで席に着いた。

そして、次に呼ばれたのは、

「序列四位、土田・D・雄大」

俺だ。順位は、合格発表の際に予め聞かされていて、大した驚きもない。ただ、この順位は些か面倒な立ち位置だ。下から狙われやすい。特待生でなければ、学費を払わなければいけなくなる。そうなれば俺はこの学校にいれなくなってしまう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5491t/>

ドラゴン・ファイト

2011年10月10日03時24分発行